

■第10回「哲学系読書会(仮)」

■日 時：2021年01月14日(木) 18時より21時半まで

■課題書：ウィットゲンシュタイン『論理哲学論考』(岩波文庫、2003年、原書1918年)

野矢茂樹『ウィットゲンシュタイン「論理哲学論考」を読む』(ちくま学芸文庫、2006年、親本2002年)

■参考文献：永井 均『ウィットゲンシュタイン入門』(ちくま新書、1995年)

黒田 亘・編『ウィットゲンシュタイン セレクション』(平凡社ライブラリー、2000年)

ラッセル『論理的原子論の哲学』(ちくま学芸文庫、原書1918年)

一ノ瀬正樹『英米哲学講義』(ちくま学芸文庫、2016年)

■報 告：山本

■会 場：大阪市／北区民ホール・第3会議室 (TEL.06-6315-1500)

★プロフィール

ルートヴィヒ・ヨーゼフ・ヨーハン・ヴィットゲンシュタイン(独: Ludwig Josef Johann Wittgenstein、1889年4月26日 - 1951年4月29日)は、オーストリア・ウィーン出身の哲学者である。のちイギリス・ケンブリッジ大学教授となり、イギリス国籍を得た。以後の言語哲学、分析哲学に強い影響を与えた。

ケンブリッジ大学・トリニティ・カレッジのバートランド・ラッセルのもとで哲学を学ぶが、第一次世界大戦後に発表された初期の著作『論理哲学論考』に哲学の完成をみて哲学の世界から距離を置く。その後、オーストリアに戻り小学校教師となるが、生徒を虐待したとされて辞職。トリニティ・カレッジに復学してふたたび哲学の世界に身を置くこととなる。やがて、ケンブリッジ大学の教授にむかえられた彼は、『論考』での記号論理学中心、言語間普遍論理想定の哲学に対する姿勢を変え、コミュニケーション行為に重点をずらしてみずからの哲学の再構築に挑むが、結局、これは完成することではなく、癌によりこの世を去る。62歳。生涯独身であった。なお、こうした再構築の試みをうかがわせる文献として、遺稿となった『哲学探究』がよく挙げられる。そのため、ウィットゲンシュタインの哲学は、初期と後期が分けられ、異なる視点から考察されることも多い。(Wikより)

★キーワード：世界(私の世界)、論理形式、論理空間、事実(現実)、事態(可能性)、対象、名、命題、命題関数、構成要素、限界(境界)、像、真理関数、真理操作、内的／外的、基底、独我論

★『論考』7つの主要命題(一ノ瀬正樹『英米哲学講義』ちくま学芸文庫、2016年)

- ①「世界は成り立っていることがらの全体である」
- ②「成り立っていることがら、すなわち事実とは、いくつかの事態の成立である」
- ③「事実の論理的像が思考である」
- ④「思考とは有意味な命題である」
- ⑤「命題は要素命題の真理関数である」(後半)
- ⑥「真理関数の一般的形式は、 $[p, \bar{p}, N(\bar{p})]$ である。これは命題の一般形式である。」(後半)
- ⑦「語りえないものについては沈黙しなければならない」(後半)

★『論理哲学論考』(以降、『論考』)の全体構成(『論考』解説の野矢の構成による)

1.目標と方法——(序)

[前半]

2.世界／世界の可能性(1～2-2063)

3.像(2-1～2-225)

4.思考(3～3-05)

5.像としての命題(3-1～4-128)

[後半]

6.真理操作(4-2～5-5423)

7.基底／独我論(5-55～5-641)

8.操作と形式／数・論理学・数学・自然科学(6～6-3751)

9.倫理 (6-4 ~ 6-45)

10.謎の解消 (6-5 ~ 7)

■以下、野矢の構成に基づいて[前半]のレジюме作成(訳語は、適宜、黒田訳を併記)、なお[ ]内は山本のコメント。(2021.01.29 一部修正)

## 1. 目標と方法——(序) (『論考』解説)

1-1. 「本書は教科書ではない」 ← 「おそらく本書は、ここに表されている思想——ないし類似した思想——をすでに自ら考えたことのある人だけに理解されるだろう。」(序『論考』 p.9)

この点に、野矢は注目(『「論理哲学論考」を読む』、以降『読む』 p.309 ~ 310)

『論考』は誰に向けて書かれたのか。

①ただひたすら自分に向けてか。→[私の言語]

②論理空間を共有する仲間に向けてか。→[表記としての、私/われわれ、の揺れ]

③異なる論理空間を生きる他者に向けてか。→[独我論]

『論考』は独我論を受け入れているので、③ではありそうにない。

にもかかわらず、野矢は『論考』の叙述を反独我論的な脈絡に位置づけることは可能であると考えられる。なぜなら、『論考』の独我論は現象主義的な独我論ではないと捉えるから。(→「他我論」は発生しない)

→[cf; 永井の立場は独我論という認識論ではなく、〈独在性〉という存在論(〈独在性〉=内面的・発見的に把握されるしかない〈この私〉という実存)]

1-2. 本書の意義(要約): 「およそ語られうることは明晰に語られうる。そして、論じえないことについては、ひとは沈黙せねばならない。」 → 「かくして、本書は思考に対して限界を引く。」(序『論考』 p.9)

1-3. 「思考に限界を引くにはわれわれはその限界の両側を思考できねばならない(それゆえ思考不可能なことを思考できるのでなければならない)からである。

したがって限界は言語においてのみ引かれうる。そして限界の向こうは側は、ただナンセンスなのである。」(序『論考』 p.9 ~ p.10) → [ナンセンス=論理形式に違反。『論考』註 54 参照]

1-4. 「本書に表された思想が真理であることは侵しがたく決定的であると思われる。それゆえ私は、問題はその本質において最終的に解決されたと考えている。」 ← 28歳のWのこの自信はどこから生じたのか? 野矢によれば、フレーゲ、ラッセルは『論考』を理解し得なかった。

[本書は間違いであるが、『論考』の構図は基本的に正しい。] (『読む』 p.16 ~ 17)

### 1-5. 野矢の解説 (『論考』 p.225 ~ 227)

「論考」の基本問題: 「私にはどれだけのことが考えられるのか」

方法としては、

思考の限界を見通すことによって、思考しえぬものを浮き彫りにする。

→言語の限界を明らかにすることによって思考の限界を示そうとする。→Wはそこに二つのことを賭ける。

①哲学問題が思考不可能な問題であることを示し、いっさいの哲学のお喋りに終止符を打とうとする。

②論理、価値、生に関わることを、思考によってではなく、ただ沈黙のうちに生きることによって受け入れようとする。

→思考の限界の問いに代えて、「私にどれだけのことが語りうるのか」という問いが問われる。

←これこそが『論考』の核心をなす問い。

### 1-6. 永井の解説 (『入門』 p.46 ~ 48)

①『論考』出版に付き、編集者に宛てた手紙を引用。

「この本の意義は倫理的なものです。(…)私の仕事は二つの部分からなる、そこに書かれていることと、書かれなかったすべてと、というようにです。そして、重要なのは、実はこの後者の方なのです。というのは、私の本は、倫理的なことがらをいわば内側から限界づけており、そして私の確信するところでは、倫理的なことがらとは、ただそのようにしてのみ限界づけられうるものだからです。」

②『論考』とは、沈黙すべきものを内側から限界づけ、そのことによってそれを正当な位置に与えるために書かれた書物。

③本当に重要なのは、明晰に語りうることがらではなく、沈黙しなければならないことがらにあったのである。

## 2. 世界／世界の可能性 (1~2-2063)

### 2-1. 世界

「世界は成立していることがら (Fall) の総体である。Die Welt ist alles, was der Fall ist.」(1)

[Fall: こと、場合、事実、ケース、英訳: case、永井・訳: 「そうであること」、事柄: 物事の内容・ようす。また、物事そのもの(大辞泉)]

→[成立していることがら=この現実世界の事実のこと]→「現実の全体が世界である。」(2-063)

[野矢は世界の意味が3段階に変容すると指摘、「事実の総体」→分析を経て「不変の実体の総体」

→「意志に彩られた世界」『読む』p.306]

「世界は事実(Tatsachen)の総体、もの(Ding)の総体ではない。」(1・1)

←なぜ「ものの総体ではないのか」(『読む』p.32以降、→もの(個体)のあり方=性質と関係、「個体と性質は必ずや組になって、それゆえひとつの事実としてのみ、現れる。」『読む』p.36 ←ラッセルは、事実を構成する要素として「物、性質、関係」に切り分けた。『論理的原子論の哲学』p.35]

「世界は諸事実によって、それが事実のすべてであることによって、規定されている。」(1-11)

「なぜならば事実の総体は、何が成立しているのかを規定すると同時に、何が成立していないのかをも規定するからである。」(1-12) ←[事実の総体は世界の境界も規定する]

「論理空間の中にある諸事実、それが世界である。」(1-13) →[論理空間⊃諸事実=世界]

「世界は諸事実へ(に)と分解される(する)。」(1-2)

←[「世界は事実の総体」と認めながら、また「諸事実へと分解される」とは、どういうことか。

→再度諸事実に分解される(する)ことによって、新たな配列可能性が生じるということか。

しかしここでは、分解する主語の明記がない。]

註)

世界: 現実に成立していることの総体

論理空間: 論理的な可能性として成立しうることの総体(『読む』p.29)

「成立していることがら、すなわち事実とは、諸事態の成立である。」(2)

→[事実は、成立している事態を複数集めたものである、という意味]

註)

事実: 現実性=現実に起こっていることがら=私が世界において現実に出会っている所与であり、分析の出発点、複合性

事態: 可能性、起こりうることがら、分析の結果として要請されるもの、要素性(『論考』p182)

「事態とは、諸対象(事物、物)が特定の仕方結びついてできたもの。事態には現に成立している事態と、現には成立していないが成立可能な事態があり、現に成立している事態が事実と呼ばれる。また、要素的な事態が結びついてできた複合的な事態は状態(状況)と呼ばれる」(『ウィトゲンシュタイン入門』p.56)

→[事態≡諸事実]であり、事態は可能性でもあるから[可能性≡諸事実]、かつ[論理空間≡諸事実]である。

## 2-2. 対象

「事態(Sachverhalt)とは諸対象 Gegenstanden (もの,Sachen, Dingen) の結合である。」(2-01)

→[現実の事実を諸対象に分解し、その新たなる結合の可能性として、**可能的事実たる事態**が構成される、という意味]→ならば「事態とは諸対象の**可能的結合**である」と改変されるべきである。(『読む』p.38 ~ p.39) ←「可能的結合」を可能にするもの＝「**対象の代理物**」＝「**像**」＝「**言語**」]

「事態の構成要素になりうることは、ものにとって本質的である。」(2-011)

よって、次の命題

「論理においては何にひとつ偶然ではない。あるものがある事態のうちに現れうるならば、その事態の可能性はすでにそのものにおいて**先取り**されていなければならない。」(2-012)

「ものが事態のうちに現れうるのなら、その可能性はものの中に**最初から存**していなければならないのである。

(論理的なことは、たんなる可能性ではありえない。論理はすべての可能性を扱い、あらゆる可能性は論理において**事実**となる)。(...) 他の対象との**結合可能性の外**にはいかなる対象も考えることはできない。

私がある対象(Gegenstand)を事態の文脈において考えることができるならば、そのとき私には、その文脈の可能性の外にその対象を考えることはできないのである。」(2-0121)

→[cf; 「可能態→現実態」アリストテレス、「理性的なものは現実的なもの、現実的なものは理性的なもの」ヘーゲル『法哲学』の序文]

「対象を捉えるために、たしかに私はその**外的な性質**を捉える必要はない。しかし、その**内的性質**のすべてを捉えなければならない。」(2-0231) →[註8: 外的性質/内的性質]

「対象はすべての**状況の可能性**を含んでいる。」(2-014) [状況=複合的な事態]

「事態のうちに現れる可能性が**対象の形式**である。」(2-0141)

「対象は**単純**である。」(2-02) [複合命題は分解して対象化]

「対象が世界の**実体**を形づくる。それゆえ対象は合成されたものではありえない。」(2・021)

註) Wが対象と呼ぶものは事実の構成要素である**個体、性質、関係**(野矢説)。あくまでも個体だけを指す(奥雅博説)。(『読む』p.38)

[**対象**は現実の事実から**可能的な事態**へと展開するために、いわば便宜的に切り出されてくるものにすぎない。すなわち、対象とは、世界の構成要素であるよりも、**思考を展開するための手駒**なのである。『読む』p.66]

「世界の**実体**が想定しうるのは、ただ**形式**のみであり、**実質的な世界のあり方**ではない。なぜなら、世界のあり方は命題によってはじめて**描写**されるのであり、すなわち、**諸対象の配列**によってはじめて**構成**されるからである。」(2-0231) ←[実体とは?]

「ひとことで言うならば、対象は**無色**なのである。」(2-0232)

「**同じ論理形式**をもつ二つの対象は、それらの外的性質を除けば、ただそれらが**別物**であるということによってのみ、互いに**区別**される。」(2-0233) →[別物=このもの性による区別、これ=実体(ラッセル) cf; ドウンス・スコトゥス「個別性」]

註) **論理形式**: ある対象の論理形式とは、その対象がどのような事態のうちに現れるか、その**論理的可能性の形式**のこと。(「**対象の内的性質**」＝「**対象の形式**」＝「**対象の論理形式**」、その対象に対して適切に問うことのできる質問のレパートリーにほかならない。『読む』p.53, p.55)

ex) 対象 a が赤い色をしていたとしよう。対象 a にとって赤という色は外的性質であり、他の色をもつこともありえた。(…) このことを「**対象 a は色という論理形式をもつ**」と言う。また、

対象 a が論理的にさまざまな色と結びつきうることから対象 a それ自体は「無色」と言われる。  
(註 10 『論考』 p.184)

「実体とは、何が事実として成立しているかとは**独立に存在するものである。**」(2・024)  
←[ラッセル「個物はどれもが完全に独立し、自立している。』『論理的原子論の哲学』 p.51]  
「実体とは**形式と内容**からなる。」(2-025) →[内容=このものとしての実質]

「空間、時間、そして色(なんらかの色をもつということ)は**対象の形式**である。対象が存在するときのみ、世界の**不変の形式**が存在する。」(2-026)  
「対象とは**不変なもの、存在し続けるもの、対象の配列が変化**するもの、移ろうものである。」  
(2-0271) →[不変なもの、存在し続けるもの=実体のこと。cf; 対象=形式が取り出す単位(ソシュール)]  
「**対象の配列が事態を構成**」(2-0272)  
「**諸対象が事態において結合する仕方が事態の構造**である。」(2-032) ←[可能的結合]  
「**構造の可能性が形式**である。」(2-033)  
「**事実の構造は諸事態の構造**からなる。」(2-034)  
「**成立している事態の総体が世界**である」(2-04) →[成立している事態=事実]  
「**諸事態の成立・不成立が現実**である。」(2-06) →「**肯定的事実/否定的事実**」  
「**現実の全体が世界**である。」(2-065) →[現実=成立していることがら (Fall)]

### 2-3. 野矢の解説(『論考』 p. 226)

- ①「どれだけのことが考えられるのか」、これは可能性を問う問い。
- ②『論考』はこの可能性の限界を見定めようとする。
- ③可能的なものはいかにして開けてくるのだろう。
- ④見渡せばすべては**事実=現実**でしかない。たんなる**可能的なもの**など、この世界には何ひとつない。『論考』はこのことを厳格に受けとめる。
- ⑤「**事実**」は**出発点**であり、「**事態**」は**ゴール**に属している。事実から可能性へと、どうやって到達するのか。
- ⑥可能性を開くためには、**事実を対象に分解し、その対象をさまざまに組み合わせて(組み替えていく)** ことにおいて、はじめて現実にはない可能性が開けてくる。
- ⑦**事実**は要素へと分解され、**事態**へと組み立てられなければならない。
- ⑧こうして『論考』は**事実**から出発し、**可能性の限界**に向けて**分析と構成の往復運動**を行う。

### 2-4. 永井の解説(『ウィトゲンシュタイン入門』 p. 55~57)

- ①世界はどのようにできているか(論理的原子論)という問題、つまり存在論の問題にあてられている。
- ②世界とは、対象ではなく**事実(成立している事態)**を全部集めたものこと。
- ③**事態**は相互に独立であるから、ある事態が成立している(いない)ということ推論することはできない。
- ④対象が対象でありうるのは、**他の対象と結合して事態を構成しうる限りにおいて**でしかない。
- ⑤『論考』は**超越論的(先験的)**な哲学書である。←[永井は、「超越論的」と「先験的」を区別]
- ⑥Wは、世界はこのようにできている、と**独断的に主張**しているのではない。およそわれわれの言語が**確定した意味**を持ち、世界についてのなにごとかを語りうるためには、世界はこのようにできているのでなければならない、と主張している。
- ⑦『論考』は、**叙述の順序とは逆に考えられている**、と見なさなければならない。
- ⑧言語が意味を持つためには、それはある一定の**構造**を持たねばならない、したがって、世界が言語の中に**反映**されうるためには、それは言語と同じ**構造**を持たねばならない、というようにである。言語と世界は**論理形式**を共有しなければならない、とはそういうことなのである。

### 3. 像(2-1~2-225)

### 3-1. 像

「われわれは**事実の像**を作る。(2-1)」

「像は、**論理空間**において、状況を、すなわち諸事態の成立・不成立を表す。」(2-11) →[状況＝複合的な事態]

「像は現実にたいする**模倣**である。」(2-12)

「像の要素は像において**対象**に対応する。」(2-13)

「像の要素は像において**対象の代わり**となる。」(2-131)

「像は、その要素が**特定の仕方**で互いに関係するところに成り立つ。」(2-14)

「像はひとつの**事実**である。」(2-141) ←[『読む』 p.45 参照, 箱庭のパーツ(像の要素＝対象)がある仕方で配置されるという「事実」]

像の要素の結合＝構造、構造の可能性＝**写像形式** (2-15)

「ものは、**像の要素**と同じ形式で互いに関係しうる。写像形式とはその可能性にほかならない。」

「像は**現実に結びつき**、**現実に到達**する。」(2-1511)

「写像関係は像の要素ともとの**対応**からなる。」(2-1514)

「この対応は、いわば像の要素の触覚であり、像はこの触覚で現実に触れるのである。」(2-1515)

「現実と共有しなければならないもの、それは写像形式である。」(2-17)

「像は、それと形式を共有するすべての現実を写しとれる。」(2-171)

「しかし**像は自分自身の写像形式を写しとることはできない**。像はそれを提示する。」(2-172)

「像はその描写対象を外から描写する(描写の視点にあたるのが描写形式である)。だからこそ、像は描写対象を正しく描写したり誤って描写したりすることになる。」(2-173)

「しかし像はその**描写形式(表出形式)の外**に立つことはできない。」(2-174)

→[cf; 「論理形式を描写しうるには、われわれはその命題とともに**論理の外側に**、すなわち**世界の外側に**、立ちうるのだからなければならない。」(4-121) ]

「およそ像が現実を——正しいにせよ誤っているにせよ——写しとることができるために、いかなる形式の像であれ、現実と共有していなければならないもの、それが論理形式、すなわち、**現実の形式**である。」(2-18)

「その写像形式が論理形式であるとき、その像は**論理像**と呼ばれる」(2-181)

「世界を写すことができるのは**論理像**である。」(2-19)

「像は写像されるものと写像の論理形式を共有する。」(2-2)

「像は論理空間における**可能的状況**を描写する。」(2-202) →[可能的状況＝描写する状況が成立可能であることを含んでいる、ということ]

「像が描写するもの、それが像の意味(意義,Sinn)である。」(2-221) →[註 19: Sinn の定訳は意義だが、野矢によればWは区別していない。]

「像の真偽を知るためには、われわれは像を現実と比較しなければならない。」(2-223)

「ア・プリオリに真である像は存在しない。」(2-225)

### 3-2. 野矢の解説1 (『論考』 p. 227)

①分析と構成の作業を行うために、「像」が必要となる。(例示あり)

②対象の新たな組み合わせを可能的に試してみるためには、現物そのものではなく、現物を代理するものが必要。→われわれがもっているきわめて手軽な代理物は、言語である。

③事実から出発し可能性が開けるためには、事実を像で写しとることが必要。

### 3-3. 野矢の解説2 (『読む』 p. 42)

①現物ではなく、現物の抱いた物を配置させる。その、いわば世界の「箱庭」においてさまざまな可能性を試すのである。

②Wはこうした箱庭を「像」と呼ぶ。

③人間がもつに至った**箱庭装置**というのが、言語である。[cf;箱庭療法]

### 3-4. 永井均の解説 (『W入門』 p. 59～60)

- ①およそ現実(人物、地形、音楽)を記号的に表現し直そうとすれば、その記号的表現は現実の写像でなければならない。
- ②われわれはそれが写像であることを、像そのものうちに端的に読み取る。
- ③肖像画は実在の人物の像だが、その写像関係それ自体を再び絵に描くことはできない。
- ④われわれの記号活動は、どこかで必ず、写像関係の外に出てその写像関係それ自体を写像することができない(できてはならない)地点に達する。
- ⑤言語はそうした写像の一例にすぎない。

### 3-5. 黒田の解説(『ウィトゲンシュタイン セレクション』p. 60~61)

- ①『論考』の像の理論を、いわゆる「反映理論」と結びつけて理解してはならない。
- ②Wは、我々の言語ないし思考が現実の構造を模写している、あるいは反映していると主張するのではない。
- ③まったく逆に、そもそも現実の像を作るのは我々である(4-01)と強調している。
- ④「像」を内的な「表象」や「イメージ」に結びつけて理解することも避けねばならない。
- ⑤象形文字とか、絵画とか、立体的な模型などを念頭において、「像」の物理的な手ごたえを逃さぬようにすべきである。
- ⑥写される側の「対象」や、「事態」や、「状態」(事態の複合)などについても、それらを感覚的直接的な所与に結びつけて現象主義的に解釈するのは避けたほうがよい。
- ⑦像の理論にはH・ヘルツの『力学原理』の影響があり、むしろ物理的な粒子とその結合をモデルにして発想されたと信すべき理由がある。

## 4. 思考(3~3-05)

- 「事実の論理像が思考(思想)である。」(3) ←[思考としての像=何らかの心的な要素が配列され結びつき構造化されたもの]
- 「ある事態が思考可能である」ということは、われわれがその事態を作りうるということにほかならない。」(3-001)
- 「真なる思考の総体が世界の像である。」(3-01)
- 「思考は、思考される状況(状態)が可能であることを含んでいる。思考しうることはまた可能なことでもある。」
- 「非論理的なものなど、考えることはできない。(…)」(3-02)
- 「ある思想が真であるとア・プリアリに知りうるのは、ただ、思考自身から(比較対象なしに)その真理性が認識されるときだけである。」(3-05) ←[分析的理性]

### 4-1. 野矢の解説(『論考』p. 228~229)

- ①思考が世界の可能性を捉えうることであるならば、思考とはまさに像である。
- ②思考を、「心」とか「意識」といった言葉で連想されがちな非物質的な何ものかを想定してはならない。
- ③思考も、この世界に起きたある事実が、他の事実を表現することによって成立するものにほかならない。
- ④その事実とは、独り言や声にならない咽喉の動き、キーボードを叩くことなど、なんらかの身体運動ないしそれによって生じた事実が、〈タマがポチを追う〉のような事態を表現するのであり、それが可能事態を思考するということ。
- ⑤かくして、『論考』が明らかにしようと狙う、思考の限界は「像の限界=言語の限界」と厳格に一致する。

## 5. 像としての命題(3-1~4-128)

### 5-1. 思想と命題

- 「思考は命題において知覚可能な形で表せる。」(3-1)

「われわれは、可能な状況を射影するものとして、命題という知覚可能な記号（音声記号、文字記号、等々）を用いる。

命題に対してその意味(意義)を考えること、それはすなわち射影方法を考えることにほかならない。」(3-11)

命題記号：思考を表現するのに用いる記号。(3-12) ←「命題を p や q の記号に置き換えたもの」

命題：世界と射影関係にある命題記号 (3-12)

命題に属するのは、射影されるものの可能性であり、射影されるものそれ自身ではない。(3-13)

命題にはそれが意味する事実までは含まれていないが、その事実を表現する可能性は含まれている。(3-13)

命題記号はそこにおいて命題の要素、すなわち語が特定の仕方でお互いに関係しあうことによって成り立っている。」(3-14)

命題に含まれるのは意味の形式であり、内容ではない。(3-14)

命題は語の寄せ集めではない。(3-141) ←[語の配列、論理形式]

命題が語へと分節化される。(3-141)

意味を表現しうるのはただ事実だけであり、名の集まりではない。(3-142)

命題記号はひとつの事実である。(3-143) ←[像はひとつの事実である。](2-141)、命題記号=命題の像]

命題記号がひとつの事実であることは、手書き文字や活字という通常の表現形態によって見えにくいものとなっている。(隠蔽されている)

というのも、たとえば印刷された命題では、命題記号と語との本質的な相違が一見したところ分からないからである。←[命題記号=事実、語=命題の要素分=名]

そのことによってフレーグが命題を合成された名と呼んだことも、この混同から生じたものと言えよう。(3-143) ←[名は命題の構成要素]

「状況は記述されうるものであり、名指されうるものではない。

(名は点にたとえられ、命題は矢にたとえられる。命題は[肯定・否定という二方向の]意味をもつ。)(3-144)

註) 名(『論考』p.185)

命題は名だけからなる、名以外の構成要素をもたない。これは事実が対象だけからなり、対象以外の構成要素をもたないことに対応する。そして名は対象を指示する。命題の構成要素はすべて「名」と呼ばれる。

## 5-2. 分析の理想

思考は命題で表現される。(3-2)

思考に含まれる諸対象に命題記号の諸要素が対応。→この要素を「単純記号」と呼ぶ。そこにおいて命題は「完全に分析された」と言われる。単純記号は名と呼ばれる。(3-202)

名は対象を指示、対象が名の意味。単純記号の配列に、状況における対象の配列が対応。(3-21)

「名は命題において対象の代わりをする。」(3-22) →[単純記号=名(構成要素)←対象←事実]

「(...) 私は対象について(その性質を)を語ることはできるが、(性質を抜きにして)対象を(単独で)言い表すことはできない。命題はただものがいかにあるかを語りうるのみであり、それが何であるかを語ることはできない。」(3-221) →[内的性質=形式は言い得ても、何であるか=内容は語り得ない]

「(...) 複合的なものは記述によってのみ与えられうる。そして記述は正しいか正しくないかのいづれかとなる。複合的なものについて述べた命題は、その複合的なものが存在しない場合、ナンセンスではなく、ただ偽となる。」(3-24)

→[3-144:状況(複合的な事態)は記述されうるものであり、名指されない]

「複合的なもののシンボルを一つの単純なシンボルにまとめるとき、それは定義によって表現される。」(3-24)



「命題の完全な分析が一つ、ただ一つ存在する」(3-25) → 「命題は分節化されている」(3-251)  
「定義を用いて名をさらに分解することはできない。名は原始記号である。」(3-251)  
「記号において表現されえないことを、記号の使用が示す。その記号が呑み込んでいるものを、記号の使用が表に現す。」(3-262)  
「原始記号の意味は解明(釈義)によって明らかにされうる。解明(釈義)とは、その原始記号を命題において用いることである。それゆえそれらの記号の意味はすでになんじんでいるひとだけが、解明(釈義)し理解しうる。」(3-263)  
→「Wは言語の循環の構造を認めている。「原始記号=名」の意味の解明は、その名を用いてさまざま命題を作ってみせることによって為される。／「なんじんでいる=知っている」『読む』p.72]

### 5-3. 記号表現と論理的構文

「命題のみが意味(意義)内容をもつ。名は、ただ命題という脈路の中でのみ、指示対象をもつ。」(3-3)  
「命題の各部分を表現(シンボル)と呼ぶ。(…)表現は形式と内容を特徴づける。」(3-31)  
「表現は、その表現を含むすべての命題の形式を前提とする。それゆえその表現は、それを含む諸命題の集合を特徴づける共通のメルクマールとなる。」(3-311)  
「したがって表現は、それが特徴づける諸命題の一般形式によって表される。  
つまり、その諸命題の一般形式において、当の表現は定項となり、他のすべては変項となるわけである。」(3-312) → [註 20: 定項/変項]

以下、3-318までは「命題関数」についての記述。

「記号はシンボルの知覚可能な側面である。」(3-32)  
「日常言語では、同じ語が異なった仕方で表現をする——つまり同じ語が異なったシンボルに属する——事が多い。あるいはまた、異なった仕方で表現する二つの語が外見上は同じ仕方で命題中にもちいられることも。(…)」(3-323)  
「かくしてもっとも基本的な混同が生じる。(哲学の全体がこうした混同に満ちている。)(3-324)  
「こうした誤謬を避けるために、(…)論理的文法——論理的構文論——を忠実に反映した記号言語を用いなければならない。」(3-325) → [フレーゲ、ラッセルの概念記号では不十分]  
「論理的構文論においては、断じて記号の意味が役割を果たすようなことがあってはならない。論理的構文論は記号の意味を論じることなく立てられねばならず、そこではただ諸表現を記述することだけが前提にされている。」(3-33)

### ●ラッセルの「タイプ理論」の問題点について(3-33~3-333)

★タイプ理論:「いかなる命題も自分自身については語ることはできない。なぜなら、ある命題記号が当の命題記号自身のうちに含まれることはありえないからである。」(3-332) → [自己言及の否定]

★ラッセルの誤り:「記号の規則を立てるのに記号の意味(指示対象)を論じなければならなかった点に示されている。」(3-331) ← [野矢によれば、ラッセルはこの批判を理解できなかったのではないだろうか。『読む』p.93]

#### ★Wによる、ラッセルのパラドックス解決

「関数自身をその関数の入力項とすることはできない。なぜなら、関数記号はすでに入力項の原型を含んでおり、そしてその原型には自分自身はふくまれないからである。  
そこで[関数  $fx$  を変項とする]関数  $F(fx)$  が自分自身の入力項になりえたと仮定してみよう。そのとき、「 $F(F(fx))$ 」という命題が存在することになる。ところがこの命題の外側の関数  $F$  と内側の関数  $F$  は異なる意味をもっているのだからなければならない。というのも、内側は  $\phi(fx)$  という形式であるのに対し、外側は  $\phi(\phi(fx))$  となるからである。二つの関数に共通なものの文字「 $F$ 」にすぎない。だが文字それ自体で何も表さない。  
このことは、「 $F(Fu)$ 」の代わりに「 $(\exists \phi) : F(\phi u) \cdot \phi u = Fu$ 」と書くと、ただちに明らかになる。かくして、ラッセルのパラドックスは片づく。」(3-333)

[これ (Wの関数) がフレーゲ的な関数とはまったく異なっているという点が決定的に重要となる。(…) フレーゲにとって関数とは世界の対象とともに働く実質をもった道具立てであり、だからこそ、関数それ自身も対象として再び関数の入力項になりえたのである。しかし、『論考』の場合は関数はただ言語のあり方を整理するための便法にすぎない。それはそれ自身対象となりうるような実質をもたない。ただの入力項たる名と出力項たる命題の対照表にすぎない。いわば、Wは関数を徹底的にノミナルに捉えるのである。『読む』 p.90 ~ 91]

- **フレーゲの関数** : 「xは白い」の場合、xに入力されるのは「ポチ」という名が指示する対象、出力されるものは真偽 (関数が働く場所は言語の外)。  
**ラッセルの関数** : 入力対象、出力は命題 (言語表現の意味、意味する対象や命題内容において働くもの)
- **Wの関数** : 論理形式の解明のために工夫された手段、あくまでも言語の中でのみ働く。定義域はポチという対象ではなく「ポチ」という名である。値域は真偽ではなく、「ポチ—白い」といった命題とされるが、ラッセル的な言語表現の意味内容ではなく、「ポチ—白い」という言語表現そのもの。(『読む』 p.90)

「定義とは、ある言語から他の言語への翻訳規則である。(…) これが、すべての正しい記号言語が共有するものである。」 (3-344)  
「どの**真理関数**の表記も、たとえば、 $[ \sim p ]$ と $[ p \vee q ]$ という表記法を用いて書き換えることができる。それはすべての真理関数の表記法に共通なことである。」 (3-344)  
「命題は論理空間の中に一つの領域を規定する。この論理的領域は、もっぱらその領域の構成要素の存在、すなわち有意義な命題が存在することによって、保証されている。」 (3-4)  
「命題記号と論理的座標、これが論理的領域を形づくる。」 (3-41)  
「使用された——すなわち思考された——命題記号が、思考である。」 (3-5)

#### 5-4. 意味と理解

「思考とは**有意味な命題**である。」 (4)  
「命題の総体が**言語**である。」 (4-001)  
「日常言語から言語の論理を直接に読みとることは人間には不可能である。」 (4-002)  
「哲学的なことがらについて書かれたきた命題や問いはのほとんどは、誤っているのでなく、ナンセンスなのである。(…) 哲学者たちの発するほとんどの問いと命題は、われわれが自分の言語の論理を理解していないことに基づいている。」 (4-003)  
「すべての哲学は「**言語批判**」である。ラッセルの功績は、命題の見かけ上の論理形式が必ずしもその実際の論理形式になっていないことを示した点にある。」 (4-0031)

「命題は**現実の像**である。  
命題は現実に対する模型であり、そのようにしてわれわれは現実を想像する。」 (4-01)  
「命題はその意味[すなわち**論理空間における論理的表現**]を示す。  
命題は、それが真ならば、事実がどのようなものであるか[すなわちその**論理的領域の範囲**]を示す。そうして事実がかくかくであるということを語る。」 (4-022)

「現実**は**命題によって完全に記述されていなければならない。  
命題とは**事態の記述**にほかならない。  
対象の記述がその対象にとって**外的な性質**に従って為されるように、命題は現実がもつ**内的な性質** (すなわち**論理形式**) に従って現実を記述する。  
命題は、論理的足場を頼りに世界を構築する。  
(…) 命題から帰結を引くためには、その命題が偽であってもかまわない。」 (4-023)

「命題において状況は**いわば実験的に構成**される。  
「この命題はしかじかの意味をもつ」と言う代わりに、はっきりと「この命題はしかじかの状況を

描写する」と言ってよい。」(4-031)

「ある名はあるものを表し、他の名はまた別のものを表し、そしてそれらの名が互いに結合されている。その全体が——活人画のように——事態を表現する、」(4-0311)

「命題の可能性は記号が対象の代わりをするという原理に基づいている。

「論理定項」はなんらかの対象の代わりをするものではない。事実の論理は記号で表しえない。これが私の根本思想である。」(4-0312)

→[論理定項は名(対象の代わり)ではなく「操作」である。「論理語が名でないならば、論理語は対象を表さない。それゆえ、論理語に関わる理論は世界のあり方についての理論ではない。フレーゲ的な論理観とは根本的に異なる論路観。]『読む』p.168

→操作という概念は根本思想に関わる中心概念であるのはなぜか→操作の反復適用という概念：「以下同様」→「無限」概念へ(『読む』p.169)

## 5-5. 否定命題

「否定命題は否定される命題とは別の論理領域を規定する。

「否定命題は、自らの論理領域を、否定される命題の論理的領域の外側にあるもと記述する。こうして否定命題は、否定される命題の論理的領域を利用して、その論理的領域を規定するからである。」(4-0641)

→[「命題は現実の像であることによるのみ、真か偽かでありうる。」(4-06) とすると、否定命題の像は何の像であるか。

野矢の解答：「p ではない」という否定命題は、事態 p の像。肯定命題は事態を肯定的に写し、否定命題はそれを否定的に写す。否定命題はその真理領域の中に p を含ませないような仕方で p を写すということ。「命題 p の真理領域を反転させるような仕方で事態 p を写せ」、『読む』p.111 ~ 112]

←[cf ; 否定的事実は存在するかという問題、ラッセル『論理的原子論の哲学』p.70 ~ 76]

## 5-6. 哲学と科学

「命題は事態の成立・不成立を描写する。」(4-1)

「真な命題の総体が自然科学の全体(あるいは諸科学の総体)である。」(4-11)

「哲学は自然科学ではない。

(「哲学」という語は、自然科学と同じレベルのものを意味するのではなく、自然科学の上にある、あるいは下にあるものを意味するものでなければならない。)」(4-111)

「哲学の目的は思考の論理的明晰化である。

哲学は学説ではなく、活動である。

哲学の仕事の本質は解明することにある。

哲学の成果は「哲学的命題」ではない。諸命題の明確化である。

思考は、そのままではいわばぼやけている。哲学はそれを明晰にし、限界をはっきりさせねばならない。(4-112)

「哲学は自然科学の議論可能な領域を限界づける。」(4-113)「

「哲学は思考可能なものを境界(限界)づけ、それによって思考不可能なものを境界(限界)づけねばならない。

哲学は思考可能なものを通して内側から思考不可能なものを限界づけねばならない。」(4-114)

「哲学は、語りうるものを明晰に描写することによって、語りえぬものを指し示そうとするだろう。(4-115)

「およそ考えられうることすべて明晰に考えられる。言い表しうることはすべて明晰に言い表しうる。」(4-116) ←「論理実証主義に影響を与える」

## 5-7. 語られること、示されること

「4-12」～「4-1212」は、<註>「示す/語る」>と同じ内容を展開。

「示されうるものは、語られえない。」「4-1212」

註)「示す／語る」(『論考』 p.193～194)

- ①命題が世界について語るために、命題と世界は論理形式を共有していなければならない。
- ②しかしそれらの論理形式を、命題は語るができない。論理形式を語るということは論理空間全体を語ることに通じるから。
- ③論理空間全体を語ろうとするならば、その論理空間の外に立たねばならない。だが、それは不可能である。
- ④さまざまな命題を実際に用いて何事かを語ることに於いて、その命題と世界が共有している論理形式を理解することはできる。こうして語りえないものを理解するとき、Wは「示される」と言う。
- ⑤命題はそれが世界と共有する論理形式を示し、その論理形式によって張られる論理空間を示すのである。

#### 5-8. 対象や事態の形式的性質について、あるいは事実の構造の性質について。また、形式的関係や諸構造の関係について (4-122～4-1252)

内的性質＝構造の性質、内的関係＝諸構造の関係、  
内的性質と狭義の(外的)性質との区別(多くの哲学者がこの区別を混同しているが、その理由を指摘する。)

ex.)「Wは結婚したことがない」は、外的性質。

「事実の内的性質を、われわれはまた、事実の相貌と呼ぶことができる。(人相について語るような意味において)」(4-1221)

#### 5-9. 形式的概念につて (4-126～4-128)

旧来の論理学全体が形式的概念と狭義の概念との区別を混同している。その理由を明らかにする。  
「形式的概念を、狭義の概念の場合のように関数を用いて表すことは、まったく不可能である。」  
(4-126) → [註 43『論考』]  
「論理形式には数が欠けている。  
それゆえ論理には特別扱いされる数など存在しない。」(4-128)

#### 5-10. 野矢の解説 (『論考』 p. 229～230)

- ①事実と命題をどのようにしてその要素(対象と名)に分解するのか。
- ②事実から対象を取り出すとは、その対象をさまざまな事態のうちに現れうるもとして捉えることを意味している。
- ③ある対象がいかなる事態のうちに現れうるのか、その論理的可能性を、Wは「論理形式」と呼ぶ。
- ④すなわち、事実から対象を取り出すためには、その対象の論理形式を明らかにしなければならない。
- ⑤対象の論理形式は、命題における名の論理形式として明らかにされる。→名が何を意味するかが解明される。
- ⑥以上から新たな可能性を構成する道へと折り返す。: 名の意味の解明→その論理形式も明らかに  
→その名を用いて構成しうる有意味な命題の可能性へ→論理形式にしたがって名を組み合わせる  
→可能な事態へ  
←「命題は、論理的足場を頼りに世界を構築する。」(4-023)「命題において状況はいわば実験的に構成される。」(4-031)

#### ■前半のまとめ

- ① 1番台で出発点となる現実世界についての確認。世界は事実から成り立つ。
- ② 2-0番台で世界への可能性へと眼が向けられ、それに伴って 2-1番台で像に関して一般的に論じられる。
- ③ 3-0番台で像としての思考について軽く触れたあと、3-1番台から像ということで中心的に考え

られている命題についての検討に入る。

④以下3番台は主として命題の名への分析について論じられる。

⑤4.0番台で主として命題の意味について論じられる。

⑥3-1から4.0番台までが、『論考』の理論的中心の前半：名付けて「要素命題論」（『読む』p.210）